

平成20年度 第1回 市史を読む会 「有馬郡の神戸市合併運動と兵庫県の合併構想」について

平成20年10月11日(土)、まちづくり協働センターにおいて阪南大学非常勤講師の伊崎文彦さんを講師にむかえて第1回市史を読む会が行われました。計5回にわたって行う今年度の市史を読む会は、『三田市史』第6巻(近代資料2)に掲げた歴史資料をとりあげ、執筆者が史料を読む「楽しみ」をお伝えするものです。今回の市史を読む会には以前よりこれまでにないほどの反響を頂いており、当日も数多くの参加者を得て行われました。

ここ最近「平成の大合併」などといって同じ兵庫県でもいくつかの自治体が合併して姿を消し、また新たな自治体が生れています。今回は、昭和30年頃のいわゆる「昭和の大合併」がテーマでした。私たちの暮らすここ三田市も、「昭和の大合併」では大変大きな影響をうけました。特に問題となったのは、当時の三田町や三輪町が行った神戸市との合併をめぐる運動です。その際三田町と三輪町が作成した陳情書が現在も三田市に残されており、活字に直したものを史料165・168として掲載しています。



当日はこの陳情書を、参加された方の何人かに代表して読んでいただきました。比較的近年の文章でもあり皆さんスラスラと読まれ、それには講師も目を丸くするほどでした。その後講師による内容の解説に移りましたが、昭和29年には三田町で神戸市との合併が住民投票で否決されるなど、地域内で合併の意向が必ずしもまとまらない状況にあったことなどが確認されました。

また当日は活字に直されたものだけでなく、史料の原物を映像でご覧いただきました。その一つが陳情書の下書きです。これは手書きでしかも色々書き込まれているため一見雑多な史料のように思われがちですが、実は完成した陳情書では分からない宛名など、大変貴重な情報が書き込まれていました。記録の損失が大きな問題となっている昨今、後世に残すべき資料とは?といったことを改めて考えさせられる機会となりました。

では一方、兵庫県は神戸市との合併をどのように考えていたのか。それを示すのが史料167です。その内容は、神戸市は市域規模がすでに肥大化しすぎているなどといった理由から、神戸市との合併に反対するものでした。講師によると、その背景には兵庫県が神戸市に対して行政指導などの優位性を確保する狙いがあったのではないかとのことでした。

そして最後に、これらの動向の最中に長尾村のみが神戸市に合併された理由について参加者から質問があり、お互いの意見を交換することができました。

今回の市史を読む会を通じて、まず、資料編には三田市が成立する背景や経緯をうかがえる史料がまとめて載っていること、またそれらを記す文章は私たちが比較的読みやすいものであったこと、などの発見があったかと思います。参加できなかった方も、これを機会にぜひ一度資料編を手にとってみてください。

次回は11月8日(土)、神戸大学の河島真さんに昭和戦前に神戸市が現三田市域に水源を求める動向について、同じく『三田市史』第6巻の史料をもとにお話頂く予定です。ご期待ください。

(三田市史編さん担当)